

科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和元年6月17日現在

機関番号：32689

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2015～2018

課題番号：15K01570

研究課題名（和文）生徒にとって望ましい運動部活動の指導の在り方に関する研究

研究課題名（英文）Research on desirable teaching methods for students in athletic clubs

研究代表者

深見 英一郎（fukami, eiichiro）

早稲田大学・スポーツ科学学術院・准教授

研究者番号：10351868

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 1,700,000円

研究成果の概要（和文）：形成的評価法は、日頃の運動部活動についての評価や観察の視点が示され、練習内容や生徒への対応の仕方に関する改善ポイントが提示されるという利点がある。本研究では、生徒にとって望ましい運動部活動の指導の在り方を明らかにするために、先行研究をふまえて運動部活動に関する形成的評価法を作成した。

また、学習指導要領において運動部活動では生徒の自主的・自発的な取り組みが推奨されている。実際に、指導現場では生徒と意見交換を行い、彼らの意見を十分に反映した指導が行われているのか。さらに、生徒の主体性を重視した運動部活動は生徒から高く評価されているかを明らかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義

運動部活動の形成的評価が全国の運動部活動の指導現場で積極的に活用されるようになれば、指導者は継続的に日々の指導実践を振り返り、運動部活動の改善や指導能力の向上に繋がる情報を得られるとともに、運動部活動の存在価値を一層高めることが期待できる。

また、文部科学省が指摘しているように、練習や試合に関わる方針等については生徒同士で主体的に話し合わせ、できるだけ彼らの意見を取り入れ、生徒の主体性を尊重することが望ましいことを明らかにした。

研究成果の概要（英文）：The formative evaluation method shows the observation point of view on daily activities of the athletic clubs, and presents improvement points on the practice contents and teaching methods. In this study, in order to clarify desirable teaching methods for athletic club for students, a formative evaluation method for athletic clubs was created based on previous studies.

In addition, in the course of study, voluntary activities of students are recommended in athletic clubs. In the actual teaching, the coach exchanged opinions with the students and clarified whether they were actively incorporating their opinions. Furthermore, it was clarified whether the students were evaluating the teaching methods of the coach who emphasized the independence of the students.

研究分野：スポーツ教育学

キーワード：運動部活動 指導者 生徒の主体性 部員の形成的評価

1. 研究開始当初の背景

運動部活動は学校の教育活動の一環として取り扱われているが、教科体育とは異なり、学習指導要領において教育目標や内容が明確に示されていない。固有の教育目標や内容が記されていない運動部活動の取組について、一体何をどう評価すればよいのかといった意見や、そもそも何のために評価指標を作成するのかといった見方があるかもしれない。効果的で質の高い練習環境を提供するため、指導者は生徒たちの声に耳を傾け、彼らの考え・意見を聴取する必要がある。そのためには、日頃の練習方法、生徒への対応の仕方を振り返って評価・反省し、次の指導改善に役立てるための簡便な評価指標の作成が必要である。本研究で開発された運動部活動の形成的評価が全国の運動部活動の指導現場で積極的に活用されるようになれば、指導者は継続的に日々の指導実践を振り返り、指導の目標・内容・方法を評価・反省し、運動部活動の改善や指導能力の向上に繋がる情報を得られるとともに、運動部活動の存在価値を一層高めることが期待できる。

また、運動部活動が目指す方向性について、文部科学省(2014)は、「……勝つことのみを目指すことのないよう、生徒が生涯にわたってスポーツに親しむ基礎を育むこと、発達の段階に応じた心身の成長を促す」とことと指摘している。運動部活動の指導では、活動目標及びその目標達成に向けた練習計画・内容を決定し、確実に遂行させることが重要である。目標の定まらないコーチングやトレーニングでは、チームや部員は舵を失った航海のように不安な日々を送ることになるからである(岡澤, 2001)。体育の授業場面及び教師の相互作用行動の主導性の実態と、学習者の形成的授業評価との関係から、学習者の主体性を尊重した指導スタイルが授業成果を高めることが明らかにされている(吉野ほか, 2000)。練習や試合に関わる方針等については生徒同士で主体的に話し合わせ、できるだけ彼らの意見を取り入れ、生徒の主体性を尊重することが望ましいと考える。

2. 研究の目的

本研究では、運動部活動に対して生徒は何を求めているのか、また日々の練習や取組を生徒はどのような観点で評価するのかを検討することにより、生徒の運動部活動に関する形成的評価の構造を明らかにした。さらに、生徒の特性と運動部活動の形成的評価の各因子別得点との関係から、作成した形成的評価尺度の有効性を検討した。

また、チームの目標設定のしかた(誰が決定し、チームでどの程度共有できているか)、個人の目標設定のしかた(どのくらいの生徒が目標を立てて、目標達成に向けて実際に行動できているか)、チームの勝利志向性(勝つことをどの程度、重視しているか)、生徒の意見の反映度(練習や試合において、生徒の意見はどの程度、反映されているか)それぞれの実態を明らかにするとともに、それらの実態と生徒の満足度との関係について検討した。

3. 研究の方法

調査票を作成するにあたって、運動部活動に対する生徒、指導者、指導者と生徒の両方それぞれの目標や受けとめ方、さらには取組に着目した調査研究、また生徒の運動有能感調査(岡沢ほか, 1996)や体育授業の形成的評価(高橋ほか, 1994)といった計10の調査研究で適用された調査項目を参考にした。これらの研究で使用された調査項目の中から、日頃の運動部活動への取組を適切に評価することを目的に質問項目を厳選し、15項目からなる運動部活動に関する評価項目を設定した。調査の対象者は、中学校の延べ296部に所属する中学生4104人、高校の延べ265部に所属する高校生3922人、計8026人に回答してもらった。運動部の指導者は、中学校290人、高校249人の計539人であった。

また、表1に示した運動部活動への取組に関する調査票を作成した。この調査票は、(1)チームの目標設定(目標の有無、決定者、共有状況)、(2)個人の目標設定(目標の有無、達成計画、達成努力)、(3)チームの勝利志向性(徹底して勝つ、ある程度勝つことを中心にしながら楽しむ、みんなで楽しむことを中心としてできれば勝つ、とことん楽しむ)、(4)生徒の意見の反映度(とても反映されている、反映されている、あまり反映されていない、ほとんど反映されていない)、(5)生徒の満足度(とても楽しい、どちらかという楽しい、どちらかという苦しい、とても苦しい)の5観点について調査するものである。対象とした運動部数と部員数は、中学校の運動部292部とその部員4104名、高校の運動部249部とその部員3944名、合計541部8048名であった。

表1 運動部活動への取り組みに関する調査票

- 1) 所属している運動部にはチームが目指す目標はありますか (ある/ない)
 - 1-1) 「チームの目標がある」と回答した方へ、その目標は誰が決めましたか
指導者/指導者と一部の生徒 (主将、副主将など)/指導者とすべての生徒/すべての生徒
 - 1-2) 「チームの目標がある」と回答した方へ、その目標はチームで共有できているか
すべての生徒が共有している/一部の生徒が共有していない/ほとんどの生徒が共有していない
- 2) 所属している運動部において個人の目標を設定していますか (ある/ない)
 - 2-1) 「個人の目標がある」と回答した方へ、その目標達成に向けた計画はありますか
具体的な計画がある/なんとなく計画はある/計画はない
 - 2-2) 「個人の目標がある」と回答した方へ、その目標達成に向けて努力できているか
十分に努力できている/努力できている/あまり努力していない/ほとんど努力していない
- 3) 所属している運動部は何を目指して活動していますか (勝利志向と楽しみ志向)
徹底して勝つ/ある程度勝つことを中心にしながら楽しむ/
みんなで楽しむことを中心とし、できれば勝つ/とことん楽しむ
- 4) 所属している運動部の練習や試合に生徒の意見は反映されていると思いますか。
とても反映されている/反映されている/あまり反映されていない/ほとんど反映されていない
- 5) 運動部活動に対する満足度 (部活動は楽しいか)
とても楽しい/どちらかという楽しい/どちらかという苦しい/とても苦しい

4. 研究成果

15 項目の評価項目に因子分析を実施したところ、表2に示したように運動部活動の形成的評価は、「指導者との充実したコミュニケーション」、「自主的・計画的な練習」、「充実した取組による愛好的態度の向上」の3因子で構成されていることが明らかにされた。また、作成された運動部活動に関する形成的評価尺度の各因子を構成している質問項目は中学生と高校生の両方に共通しており、信頼性も比較的高いことが確認された。校種別ではそれぞれ「指導者との充実したコミュニケーション」、「充実した取組による愛好的態度の向上」の各因子で中学生の因子別得点の方が高かった。また部内の立場別では、すべての因子で非レギュラーよりもレギュラーの因子別得点の方が高かった。しかし、性別ではいずれの因子でも有意差は認められなかった。表3に示したように総合評価項目「今日はよい練習ができた」に対する回答結果をもとに、各因子別得点の合計の平均値を比較した結果、総合評価項目得点が高かった生徒は、3つすべての因子別得点も有意に高くなることが示された。この結果から、「指導者との充実したコミュニケーション」、「自主的・計画的な練習」、「充実した取組による愛好的態度の向上」の3因子は運動部活動の形成的評価項目として妥当であり、抽出された3因子は、生徒が評価する運動部活動を分析し、理解する上で有効な観点になると判断できた。

表2 生徒の形成的授業評価尺度の因子分析結果 (プロマックス回転) と因子間相関

		(高校生 n=3922)						
		因子	I	II	III	標準化 係数	M	SD
指導者との 充実した コミュニケーション ($\alpha=.91$)	21_指導者は納得のいく説明をしてくれた		.89	.04	-.08	.77	4.05	1.03
	25_指導者は生徒の声に耳をかたむけてくれた		.84	-.01	.01	.76	4.00	1.03
	7_指導者は生徒のやる気を引き出してくれた		.83	-.05	.06	.76	4.12	1.01
	12_指導者はアドバイスをしてくれた		.76	.07	-.05	.70	4.25	.99
	5_指導者は練習や試合において生徒の意見を反映させてくれた		.75	-.04	.09	.72	4.01	.98
自主的・計画的 な練習 ($\alpha=.83$)	11_試合を想定した緊張感のある練習に取り組めた		-.03	.86	-.09	.65	3.89	.91
	10_自分たちで考えて工夫しながら練習に取り組めた		-.10	.71	.12	.63	4.02	.84
	14_具体的な目標 (例えば回数、速さ、距離等) を持って練習に取り組めた		.04	.60	.10	.64	4.07	.87
	23_だらだらせず練習に取り組めた		.17	.57	-.01	.65	3.90	.92
	13_どうすれば上手くできるようになるかがわかった		.19	.49	.07	.66	3.93	.87
充実した取組に よる愛好的態度 の向上 ($\alpha=.78$)	2_楽しかった		-.01	-.16	.90	.59	4.35	.84
	19_自分の競技がますます好きになった		.13	.10	.58	.68	4.18	.92
	3_技能や記録が伸びた		-.04	.22	.49	.56	4.09	.90
	1_思いっきり体を動かすことができた		-.06	.18	.47	.48	4.51	.78
	8_もっと上手になりたいと思った		.08	.09	.45	.53	4.70	.63
		因子間相関		.64	.60			
					.68			

表3 総合評価項目（今日はよい練習ができた）と運動部活動に関する形成的評価との関係

形成的評価	生徒		①上位群 (3378)		②中位群 (2614)		③下位群 (2033)		一元配置 分散分析 F値	多重比較 (Tukey HSD)
	M	SD	M	SD	M	SD				
指導者との充実したコミュニケーション	22.70	3.34	20.19	3.70	17.68	4.60	1122.81	***	①>②>③	
自主的・計画的な練習	22.03	2.55	19.45	2.39	16.87	3.46	2260.08	***	①>②>③	
充実した取組による 愛好的態度の向上	23.57	1.88	21.84	2.33	19.58	3.69	1514.39	***	①>②>③	
合計得点	68.29	6.20	61.48	6.59	54.13	9.91	2344.29	***	①>②>③	

*** $p < .001$

また、表4に示したように生徒の多くは生徒中心に決定したチームの目標があり、それをすべての生徒で共有していた。また、生徒の多くは個人目標があり、目標達成に向けて計画を立てて努力していた。さらに、生徒の多くはチームが勝利志向であると捉えていた。加えて、練習や試合において生徒の意見が反映されており、生徒の満足度は高かった。チーム/個人の目標設定、チームの勝利志向性、生徒の意見の反映度それぞれが生徒の満足度に及ぼす影響を検討した。その結果、表5に示したように、1)個人の目標があり、その達成に向けて具体的な計画を立て努力できている生徒の多くは満足度が高かった。(2)ある程度勝つことを中心に楽しむ生徒は相対的に満足度が高かった一方で、楽しみ中心に取り組む生徒は相対的に満足度が低かった。(3)自分たちの意見が反映されている生徒は相対的に満足度が高かったが、逆に反映されていない生徒は相対的に満足度が低かった。(4)チーム目標は生徒中心で決定し、それをすべての生徒が共有することが生徒の満足度に繋がること示唆された。

表4 運動種目/学校種別にみたチーム目標の有無、決定者、共有状況

チームの目標	全体の割合	運動種目		残差分析	χ^2 値 (df)	学校種		残差分析	χ^2 値 (df)		
		個人 度数 (%)	集団 度数 (%)			中学生 度数 (%)	高校生 度数 (%)				
有無	目標がある	86.7% (6978)	2869 (78.4%)	4109 (93.6%)	± 20.1 **	402.79 ***	3510 (85.5%)	3468 (87.9%)	± 3.2 **	10.09 **	
	目標がない	13.3% (1070)	791 (21.6%)	279 (6.4%)	± 20.1 **	(1)	594 (14.5%)	476 (12.1%)	± 3.2 **	(1)	
	合計	100% (8048)	3660 (100%)	4388 (100%)			4104 (100%)	3944 (100%)			
決定者	指導者	9.0% (630)	366 (12.8%)	264 (6.4%)	± 9.1 **	114.52 ***	314 (8.9%)	316 (9.1%)	± 0.2	123.74 ***	
	指導者と一部の生徒 (主将, 副主将など)	9.4% (657)	326 (11.4%)	331 (8.1%)	± 4.7 **		300 (8.5%)	357 (10.3%)	± 2.5 *		
	指導者とすべての生徒	36.3% (2529)	953 (33.2%)	1576 (38.4%)	± 4.4 **		1084 (30.9%)	1445 (41.7%)	± 9.4 **		
	すべての生徒	45.3% (3162)	1224 (42.7%)	1938 (47.2%)	± 3.7 **		1812 (51.6%)	1350 (38.9%)	± 10.7 **		
	合計	100% (6978)	2869 (100%)	4109 (100%)			3510 (100%)	3468 (100%)			
共有状況	すべての生徒が共有している	77.5% (5410)	2130 (74.2%)	3280 (79.8%)	± 5.5 **	31.71 ***	2663 (75.9%)	2747 (79.2%)	± 3.3 **	15.52 ***	
	一部の生徒が共有していない	19.3% (1349)	644 (22.4%)	705 (17.2%)	± 5.5 **		(2)	743 (21.2%)	606 (17.5%)		± 3.9 **
	ほとんどの生徒が共有していない	3.2% (219)	95 (3.3%)	124 (3.0%)	± 0.7			104 (3.0%)	115 (3.3%)		± 0.8
	合計	100% (6978)	2869 (100%)	4109 (100%)			3510 (100%)	3468 (100%)			

*** $p < .001$, ** $p < .01$, * $p < .05$

表 5 個人目標の有無、達成計画、達成努力と生徒の満足度との関係

個人の目標		満足度	楽しい 度数 (%)	苦しい 度数 (%)	残差分析	χ^2 値 (df)
有 無	目標がある		6987(93.8%)	478(80.3%)	$\pm 12.2^{**}$	148.75 ^{***} (1)
	目標がない		463 (6.2%)	117(19.7%)	$\pm 12.2^{**}$	
	不 明		0	3		
	合 計		7450 (100%)	598 (100%)		
達成計画	具体的な計画がある		2500(35.8%)	120(25.1%)	$\pm 4.7^{**}$	44.55 ^{***} (2)
	なんとなく計画はある		4062(58.1%)	298(62.3%)	$\pm 1.8^*$	
	計画はない		425 (6.1%)	60(12.6%)	$\pm 5.6^{**}$	
	合 計		6987 (100%)	478 (100%)		
達成努力	十分に努力できている		1066(15.3%)	33 (6.9%)	$\pm 5.0^{**}$	146.15 ^{***} (3)
	努力できている		5041(72.1%)	304(63.6%)	$\pm 4.1^{**}$	
	あまり努力していない		856(12.3%)	129(27.0%)	$\pm 9.3^{**}$	
	ほとんど努力していない		24 (0.3%)	12 (2.5%)	$\pm 6.7^{**}$	
	合 計		6987 (100%)	478 (100%)		

*** p < .001, ** p < .01, * p < .05

【文献】

- 文部科学省 (2014) 運動部活動の在り方に関する調査研究報告書～一人一人の生徒が輝く運動部活動を目指して～.平成 25 年 5 月 27 日運動部活動の在り方に関する調査研究協力者会議 .
 岡沢祥訓 (2001) メンタルを考えよう 卓球に学ぶスポーツ心理学 . 卓球王国 .
 岡沢祥訓・北真佐美・諏訪祐一郎 (1996) 運動有能感の構造とその発達及び性差に関する研究 .
 スポーツ教育学研究, 16-2: 145-155 .
 高橋健夫・長谷川悦示・刈谷三郎 (1994) 体育授業の「形成的評価法」作成の試み - 子どもの授業評価の構造に着目して . 体育学研究, 39-1: 29-37 .
 吉野聡・元塚敏彦・岡澤祥訓・林恒明・高橋健夫 (2000) 体育授業における教師の主導性に関する意識と形成的授業評価との関係 . スポーツ教育学研究, 20-1: 19-30 .

5 . 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 2 件)

- (1) 深見英一郎、岡澤祥訓 (2018) 運動部活動の「形成的評価法」作成の試み 生徒の部活動評価の構造に着目して . スポーツ教育学研究, 37-2: 47-60 . (査読あり)
- (2) 深見英一郎、岡澤祥訓 (2016) 運動部活動における目標設定、勝利志向性、意見の反映度の実態並びにそれらが生徒の満足度に及ぼす影響 . 体育学研究, 61: 781-796 . (査読あり)

〔学会発表〕(計 4 件)

- (1) 深見英一郎 (2018) 試合に向けた望ましい選手選考の在り方：運動部活動におけるチームスポーツを対象に . 第 69 回日本体育学会 体育心理学専門分科会 ポスター発表 .
- (2) 吉井捷人、深見英一郎、友添秀則、吉永武史 (2018) 体育授業における「主体的・対話的で深い学び」を促す教師行動に関する研究 . 第 38 回日本スポーツ教育学会 一般発表 .
- (3) 深見英一郎 (2017) 運動部活動の運営に対する指導者の考えと生徒の受けとめ方との関係 . 第 68 回日本体育学会 体育科教育学専門分科会 一般発表 .
- (4) 深見英一郎、岡澤祥訓 (2016) 運動部活動におけるチーム / 個人の目標に対する意識と生徒の満足度との関係 . 第 67 回日本体育学会 体育心理学専門分科会 一般発表 .

〔図書〕(計 0 件)

〔産業財産権〕

出願状況 (計 0 件)

名称：

発明者：

権利者：
種類：
番号：
出願年：
国内外の別：

取得状況（計 0 件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

6．研究組織

(1)研究代表者

(2)研究分担者

(3)研究協力者

岡澤 祥訓（OKAZAWA YOSHINORI）
大阪体育大学・教育学部・教授

井上 一彦（KAZUHIKO INOUE）
岩手県立大学・高等教育推進センター・講師

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。